

1 分かる子だけの深い学び（考察）でよいだろうか？

「深い学び」では、専門教科の内容を掘り下げて子供たち数人が発言することをよしとしている現状があるからだ。教師が教材研究してきたことに子供数人が高度な発言をすれば、「素晴らしい」となる。従来の指導と何ら変わらない。大事なことは、フルメンバーがフルアクティブな状態で深い学び（考察）をしているかだ。数人の子供の深い学び（考察）による発言は、回りの子供は他人事となり学習意欲もわかないと思う。

2 専門教科の掘り下げた深い学びの前に

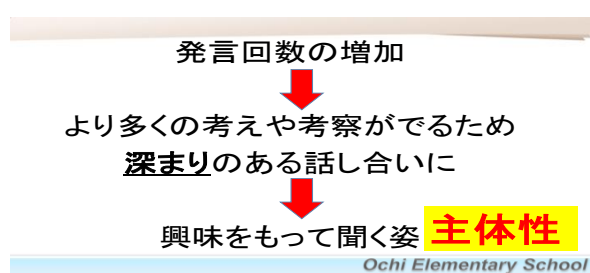
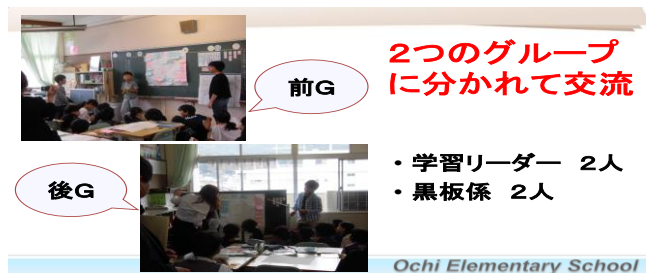
深い学びとなると、教師の介入がどうしても多くなる。ここに限られた子供しか発言する機会しかない状態が出てくる。また、班の代表が話す、分かっている子だけで質問し合うことになり、深い学びとはならない。教師との一問一答が起りやすいのはこの時だ。教師は知っていることを教えようとするために、専門知識や内容をたくさん話す。本来の深い学びは、やはり全員参加型であり、全員活躍型である。が望ましい。子供たち全員が深い学びに参加するにはどうしたらよいか考えるとよい。

3 全員活躍型の深い学び

(1) 1 授業 2 形態

全員で深い学びを行うと、どうしても参加できない子供が出てくる。全員が何らかの発言ができるようにする方法が「1 授業 2 形態方式」だ。この方法のメリットは、多くの子供たちが発言でき、質問し合う時間もゆったりとることである。実際の授業場面を紹介する。

学習過程	○学習活動・児童の反応	○教師の働きかけ ☆評価
集団解決 (23 分) ・全体の学び合い① 事実・単純な意見集約 ・全体の学び合い②相互評価（考察）	6 説得力のある提案書にするために、修正したことを、2つのグループに分かれて交流し、全体で共有する。 7 話し合いを通して考えを深める。 ・説得力をもたせるには、解決策が問題の解決につながると思ってもらう必要があるので、解決する良さを伝えることが必要だ。	6 学級全体を2つのグループに分け、各班ごとに付箋を出し合い、相手が納得する提案書にするための表現の仕方や工夫について書き込みながら交流させる。グループを回り、話し合いの状況を把握するとともに、推敲の視点がずれないように、必要に応じて助言を行う。



実践者のコメント

～本学級の児童は37名であるため、全体学習での発言に偏りが見られ、発言したくてもできない児童がいたり、時間内に全員が発言できなかったりすることが課題であった。そこで、学級を2つのグループに分けて全体学習を行うようにした。2つのグループに分けて学習を行うようになってから37人それぞれがお互いの考えや感じ方などをより多く聞けるようになった。それぞれのグループでの考察を交流すると「違うグループの考察、私たちのグループでは出てないことだね。メモしておこう。」という声も聞こえ、より興味をもって違うグループの話し合いを聞く様子が見られるようになった。～

(2) 付箋を全員が出す方式

班の中でそれぞれの考えをホワイトボードに出し合うことは当然のことである。深い学びの考察においては、班から出された情報が多すぎるので、さらに班から一つの考えの付箋に書く板書をする方法がある。また、班で話し合ってから、全員が付箋一枚に考えを書き板書をし、質問をし合う奉仕もある。いずれも全員参加や活躍型であるので一部の子供の話し合いとはならない。